

もうひとつの日本への旅

人類学者

川田順造

●第一部● 江戸東京の下町が「記憶」するもの

「みやび」と「ひなび」と「ひな」

江戸の中の「ひな」、江戸周辺の「ひな」

「荒ぶる自然」を求めて、「みちのく」（＝未知の奥）へと旅立った松尾芭蕉も、作品に結晶させたのは、「みやびな自然」ではなかつたかということを前回に述べた。

これは、一定の様式によつて文字に表現するという常為自体が、「みやび」なものである以上、自明といえるかも知れない。そこでは、「荒ぶる自然」も、「ひなび」という、「ひな」そのものの「みやびごころ」

によるとらえ返しを通して再表現されることになるのだから。

だが、「ひなび」の愛好と追求は、文芸の領域に限らない。これまでに述べてきた、江戸＝東京人の特徴として西山松之助さんが挙げる「行動文化」の内にも、それは豊かに籠められているだろう。

季節と結びついた行動文化は江戸＝東京に限らず、「みや」の本元である京都をはじめ、四季の移りわりに敏感な日本人の都市文化に、ひろく認められるだろう。だが、もともと「みや」が不在で、荒漠たる「ひな」のただ中に形成され、町人主体の豊かな消費

文化が花咲いた百万都市江戸の都市文化に、このような行動文化は顕著だと言えるのではないだろうか。八代将軍吉宗が、徳川家の菩提寺のある上野から花見の喧嘩を遠ざける意図もあって、花の名所として「創出」させたといわれる桜の飛鳥山や、度々述べた江戸各地の人工の富士山なども、江戸人の行動文化愛好をよく示しているだろう。

深川の範囲と位置づけの変遷

江戸でも「川向こう」の深川は、江戸で最も早く開けた土地の一つであるにもかかわらず、貞享三年（一六八六）に国境が変更されるまでは下総国の一部となっていたようだ。江戸で千住大橋に次いで一番目に架けられた両国橋という名も示すように、この橋は武藏国と下総国にまたがっていたのだから。

だが、ほぼ十八世紀はじめの三分の一に当たる享保年間の、世に言う享保の改革のとき、吉宗の下で改革を推進した江戸南町奉行大岡忠相が、明暦の大火後の享保五年（一七二〇）に発足させた町火消制度では、隅

田川以西の「いろは四十七組（後に本組を加えて四十八組）」と本所・深川の十六組が設けられた。依然「川向こう」としての差別はあるものの、本所・深川も「江戸の町」の一部として、制度上も認められたと言えるだろう。

とはいっても、住民の生活感覚の上では、広い意味で本所・深川とみなされていた亀戸や砂村辺りは、明治になつて東京市政が敷かれてからも東葛飾郡の一部で、

昭和七年（一九三三）に創設された東京市城東区に編入され、戦後の昭和二十二年（一九四七）に城東区と深川区が合併して江東区になつたのだ。

文政八年（一八二五）に江戸中村座で初演された、四世鶴屋南北作の『東海道四谷怪談』では、もと赤穂の塩治家に仕えた武士の下僕、砂村隱亡堀で鰻搔きに身をやつした直助が、お岩の髪や櫛を引き上げる。本稿第二十回にも引いた砂村出身のフランス文学者で、日本的小咄を愛した故田辺貞之助先生の洒脱な隨筆『女木川界隈』（実業之日本社、一九六二）によると、戦前の砂村には蓮沼が多かつたという。昭和十五年（一九四〇）に亡くなつた私の祖父も、このあたりで茶毎だいに付したのを幼心に記憶しているが、かつては「みやび」